サイノウの果てに

ユズタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サイノウの果てに

【Ｎコード】
Ｎ８７６８Ｔ

【作者名】
ユズタカ

【あらすじ】
いつもと変わらない日常、いつもの風景、いつもの友人。
特別な才能もなく、はたまた勤勉というわけでもない。
そして、何一つ不自由なく暮らせる自らの家。
そんな世界はつまらない、飽き飽きしていた主人公　臥龍（がりゅう）　麗音（れおん）。
平凡にも飽きていた主人公は新学期早々、幼馴染　椰子岡（やしおか）　優愛（ゆうあ）と共に遅刻寸前となってしまう。しかし、その遅刻によってと平凡からどんどん非凡へと周りが変わっていく…。

case. prologue

特技

それを最初から持っている人間などそういない。
むしろ…それを最初から持っているというのなら、それは

才能

と呼ぶべきものだろう。

どちらが優秀かなんて判断などできるものだろうか。
…無理やり分けると言うのならば、この世界ではこう分けられている。

『自ら努力し、苦労しながらも諦めずに得る事が出来たダイヤの原石――それが特技』

逆に…

『最初から眠っていて、それを発見し磨きあげる事が出来た黄金の塊――それが才能』

そして、この相対性となる二つの人間の賜物が関係してくるのが

能力

なのである。

…さて、ここで選択肢を与えます。特に意味のない質問ですが…。

あなたは、特技と才能の　どちらが欲しいですか？

……答えは出ましたか？

…そうですか。あなたはそちらの方を選びましたか。

どちらが正しいか。　それは自分で見つけるものです。

特技を選んだ貴方。　今の生活が楽しいですか？

才能を選んだ貴方。　今の生活に満足していますか？

私は、生活が楽しいわけでもなければ満足もしていません。

…欲張りですか？

人間、欲に囚われて生きているものです。

そして、人生を逆戻しをしてからまた再スタートができればどれだけ良いのだろうかと

考える毎日。

…長話もなんですから、どうぞこちらへ。

温かいコーヒーでも淹れましょう。

…え？今は夏？　では、冷たいミルクティーでもいかがですか？

ははっ、またまた御冗談を。

これから話すのは、私の過去の話ですよ。

なぁに、大した話ではありません。面白くもなんともないです。

ただの、青春時代の馴れ初め話をしたくなっただけですよ。

…ほぅ。それでも聞くと。

仕方がありませんね。私から繰り出した話題だ。

どんなに長くなっても知りませんよ？

…そうですね。時は……

私達の高校生時代の話です。

結論から言ってしまえば、そのころは楽しかったんだ。

…えぇ。嘘を付きましたよ早速私は。

私は…　『今の生活がとても楽しい』　と感じたんです――――

ｃａｓｅ．　１　一犬影に吠ゆれば百犬声に吠ゆ

朝。

いつも通りに目覚まし時計をぶん殴り、目覚ましが悲鳴を上げたところで俺は起きる。

今日は４月８日。新学期だ。

臥竜麗音、７時丁度に起床。

幸い、高校からはさほど離れていない。自転車で２０分弱といったところか。

新２年次となる俺の高校は単位制と言って、自分の時間割を決められる珍しい高校。

その名前は『夕陽丘高等学校～ゆうひがおかこうとうがっこう』

その名の通り、夕方部活を終えて校舎の裏側を見ると、晴れた日には美しい夕陽が映える。

「ふあ～ぁ。」

一つ、大きなあくびをしたところで妹の声が部屋に響き渡る。

「レオ君！！朝だよー！！　ごっはんーごっはんー♪」

ちょっと何を言ってるのか分かりませんけどもね。
レオというのは勿論、俺の事。小さい頃に麗音を聞き取り間違え、今の形に落ち着いた。

即席のそんな歌を歌いながら階段を駆け降りる妹。
そして、俺も階段をゆっくりと降り、顔を洗う。

「おはようございます、麗音様。今日の朝食はいかがいたしますか？」

と、俺に話しかけてきたのは、執事の瀧沢さん。…まぁ、執事なんだが…俺の家はとても大きい。
親の残した家で、両親はどちらも今はいない。
母親は外国へ行って働いており、父親は音沙汰もない。どこで何をやっているのだか。

…付け足しをしておくと、俺はおぼっちゃま扱いが苦手だ。

「瀧沢、俺はそのような言い方をするなと言っただろう…。普通に上から目線で話してくれよ。」

「…失礼、根に染みついておりまして…。」

「ほぅら、まただ。タメで話してくれよ寒気がする。」

「分かったよ。じゃあ、改めて…麗音、朝ごはんは何にする？」

と、執事はイケメンボイスでそう言った。

「普通の朝飯にしてくれ。そんな胸焼けのするような朝飯はいらないからな。」

俺はだだっ広い厨房を指さしながら言う。

指先にはシェフが3人くらいいて、俺の注文を待っている状態だ。

そして俺は続ける。

「食パンに、マーガリンとヨーロピアンブレンドのコーヒー。」

「かしこまりました。」

「…やはり直らないのな。」

「…あっ。」

まぁ、端から染みついているのは分かっているが、そのような扱いをされたくないんだ。

普通が一番なんだよ。…ただし、俺の家に関してだけだ。

学校へいつもと変わらないように行ってもなんの面白みも感じられん。

俺は席がえをわくわくしながら喜ぶタイプの人間だからな。

厨房で、シェフもいらないような朝飯を準備してもらっている間に俺はケータイを見てみる。

時刻は7時。まだ早いか…。

と、そこで一件の新着メールに気がつく。

…ユアからか。

「ごめん、今日寝坊した！！」

…いや、どうしろと。

このメールの相手は幼馴染の『椰子岡　優愛～やしおか　ゆうあ』

昔っから俺の近くに居た、漫画で見るようなマジの幼馴染。

…少々天然なのが玉に瑕。いや、もっと引き立たせているのか？

一応伝えておくが、付き合ってはいない。お互いにそのような気持ちはないのだろう…。

だが、一緒に登校しているのも災いし、まぁ…その、彼女の容姿もけして悪くないので（むしろ良い）嫉妬や勘違いも多い。

1年生の頃は学校祭のミスヶ丘の2位に輝いたんだからな…。

「どれくらいに家に着きそうだ？」

しばらくして、瀧沢が珈琲を持ってきたと同時にメールが届いた。

「8時15分くらい！！」

あー、遅刻になりそうなフラグがビンビンだぜ…。

一犬影に吠ゆれば百犬声に吠ゆ…と言うように、一人が遅刻すれば

一緒に同行する俺も遅刻するってわけだ。
三蔵法師も遅刻すれば豚と猿と河童も道連れだったってことか。
「走ってこい。」
それだけ俺は用件を伝え、ゆっくり朝食をとる。
「今日は最高級のマーガリンとパリの小麦を使用した角食をご用意いたしました。」
「……普通じゃないのな。」
「普通と言われましても、その普通がこの邸にはございませんでした…。」
「いや、その言葉遣い。飯が普通じゃないのはいつもの事だろ…。」
「あ…。」
多少呆れつつも、無駄にでかいテレビでいつもの報道番組を眺める。
すると、こんなニュースが朝から独占でやっていた。
「怪奇！？深夜徘徊する謎の人々！！」
「…深夜徘徊？普通じゃねーの？」
俺は一人でそんな突っ込みをする。
「昨夜未明から、若い人々などが忽然として消えて行くという怪事

件が発生しています。
しかし、翌日の早朝には必ず元いる場所に戻っているというなんとも不可思議な事です。
徘徊していた人に話を聞くと、全員が分からない、知らないと言っています。」

「…不思議なもんだな。記憶がねーのか。」

「レオ君ー、ユア姉ちゃんまだー？」

無邪気な妹の声が響く。
ユアというのは優愛のあだ名だ。

「あぁ。寝坊したらしいから先に行っててていいぞ？」

「分かったぁ―。行ってきまーす！」

「行ってらっしゃいませ、結衣様。」

「バイバイ羊さん！」

「…結衣様、執事でございます。」

毎日のように繰り返されるコントに付き合ってる瀧沢も健気だよな…。
とか何とか思っているうちに、入れ違いにユアが駆けこんで来た。

ｃａｓｅ．　２　事実は小説よりも奇なり

「ごめん遅刻したぁぁっっ！！！」

と、額から汗水を流している爽やかな女子高生が目の前に現れた。
こいつが幼馴染の椰子岡≪やしおか≫優愛≪ゆうあ≫。

「大遅刻だ。やめてくれよな、新学期早々に遅刻なんて…。」

「お送りしましょうか？」

「あぁ。出来れば頼む。だがベンツだけはやめろ。目立ち過ぎる。」

「えー、あれフカフカで気持ち良いのに…。」

「お前は遅刻してきた身で何をぬかしてやがる…。」

「ごめんなさい。」

あっさり謝るユアも珍しい。いつもここは突っかかってくるのにな。
そして、俺らは車に乗り込み、学校へと向かった。
その時刻は８時１５分。…約２０分かかるのだが間に合うだろうか…。

「…通勤ラッシュで道が混んでますね…。
おや、あれは葵さんでしょうか？」

瀧沢の見る方向に目をやると、全力で自転車をこぐ葵…『折谷≪おりや≫　葵≪あおい≫』の
姿があった。どうやら奴も遅刻ギリギリらしい。
しかし、車ではいけない小道を走れるので、遅刻は免れる…と思う。

「おーい！葵ー！！」

「…窓も開けないで叫ぶ馬鹿どこにいるんだよ…って現にここに居
るのか…。」

ただ、窓を開けて叫んだとしても声が耳まで届いたかどうかは定か
ではない。
鬼のような形相で自転車をこいでいる女子を想像してほしい。

…おそらく、声をかけたくはないだろうから。

「…さて、ようやく恐坂≪おそれざか≫が見えてきましたよ。」

学校へと続く大きな難関。恐坂≪おそれざか≫。
傾斜１５度とか言う、かなり厳しい坂道。
それに道幅がやたらせまいので車は通れない。なのでここで車を降
りる必要がある…。

「じゃあ、ありがとうな瀧沢！」

「いえいえ、お気をつけて急いでください。」

車から降りると俺らは一直線に走り出す。
家から走りっぱなしのユアは多少バテているが仕方がない…。

あとで大好きなチョコレートでも買ってやろう。

「やっと学校が見えてきたよッ！！」

「今の時刻は…！？」

時計を見ると、時刻は８時３４分をさしていた。

「間に合わ…無い！！」

「あきらめちゃだめっ、走るよッ！」

たかが遅刻だが、始業式が１時間目というのもあり、されど遅刻。
死に物狂いで俺らは走る。
生徒玄関には疲れ切った葵が小さく見える…。

「遅刻…したくねぇっ！！！」

その時。
一瞬だけ、太陽の光が強くなった気がした。
いや…むしろ、太陽の光が反射した校庭が光った、とでも言うべきだろうか。
どちらにせよ、全力疾走している間にそのような事を考えている暇もなく、その話を思い出すのはしばらく後である。

今ならウサイン・ボルトも抜かせるんじゃないかというくらい走った俺らは上靴を持って階段を駆け上がる。
まだ予鈴は鳴っていないっっ！！

階段を駆け上がっているときは、時間が逆転して見えた。
周りの景色が逆再生されているように。
もちろん、ユアも一緒に走っているのだが、生徒や先生が後ろ向きに歩いているのだ。

「時間はっっ！！？？」

壊れるかというぐらいにドアを殴り開けた俺は壁掛け時計を見る。
…信じられないだろうが、俺の見た光景はＭｒ．マリックもびっくりするような時刻だった。

「…８時…２５分…？」

ありえない。
いや、むしろあり得る方がおかしい。
タイムマシンに乗ったわけでもないのになんで時間が過ぎてねぇんだ！？
そもそもタイムマシンが未来にも作れるものではない事を知っていて言っているのだが…。
事実は小説よりも奇なりとはまさにこのことを指して言うのか！？

「ま、間にあった…。」

「オイ、ユア。間に合ったどころの話じゃない。
…時間が…過ぎて居ない。」

「時間が過ぎて…って…」

ユアは視線を時計に移す。

「8時…25分…？」

俺と同じセリフを2回も言うと、俺に驚愕の質問を付きつけてきた。

「あの車、タイムマシンだったの！？」

…いや。

いくら金持ちでもそんなもの持ってたら世界中の学者が押し掛けるだろうよ…。

それにしても何故だ…？

「おぉ、麗音。おはよう、同じクラスだね。」

「ん？あぁ…真か。」

俺に話しかけてきたのは『音沙汰≪おとさた≫　真≪まこと≫』

高1の時に出来た悪友。

頭はよく、物理や数学が大得意でいつもお世話になっている。

「椰子岡も一緒か？というか、なんでそんなに疲れているんだよ…。

いつもこの時間帯だろ？」

「いや、遅刻すると思ってな…。ちょっと走ってきた。」

「何も走らなくてもいいじゃないかｗｗ」

笑い転げる真。
今の状況を言っても信用はしないだろうな…。

「あ。優愛に麗音。おはよー。」

「あ！清彩！！おはよー…」

「なぁに？また君たち一緒に登校？
1年の時でもそうだったじゃん…。」

多少呆れ気味に言ったこいつは『皆藤≪かいとう≫　清彩≪さあや≫』
同じく高1の時からの友人。　一人称は僕という、変わった奴。
学力はそこそこだが、地学や宝石、そう言ったものには物凄く詳しい。

「いいじゃん、一人じゃ心細いし…。」

「いつも一人の僕はどうするんだよ…。」

「まぁそこはアドリブで。」

「お前絶対アドリブの意味分かってないだろ。」

そんな馬鹿な会話をするいつも通りの学校。
…まぁ、さっきのは時計が狂っていたとかそんなレベルの事だろうと思った。
その後は普通に始業式をやって、ＨＲを寝て過ごして、普通に一日

が終わる予定だった。
そんな予定が狂ったのはＨＲの時間だ。
「…眠い。やっぱさっき走ったせいだ。きっとそうだ。」
「いつもそう言って寝てるじゃん…。」
「って、お前、また俺の隣かよ。」
「なんか出席順がバラバラみたいで。」
「ほらそこ！話をしない！！今日は転校生を紹介するよ！」
先生に注意された。
まぁそれはいいとして、転校生だぁ？
なんだ？そのいかにも特別なキャラとして定着しそうなフラグは…。
「こんにちは。鐘鈴≪かねすず≫　サウザと言います。以後、お見知り置きを…。」
「……。」
え。
「ハーフ？」
「えぇ。母親がロシア人なんですよ。」
俺の視線を感じたかのように受け答えをする転校生…。

「じゃあ、その臥竜≪がりゅう≫君の隣に座って。」

「はい。」

「えっ、ちょっ…。」

「どうしました？具合でも悪いのですか？」

「…いや。なんでも。」

俺は気を取り直してシャーペンを握る。
しかし、サウザ…とか名乗る奴のせいでどうも落ち着かない。
そのせいでペン回しをしていた俺はシャーペンをあらぬ方向に投げてしまった。

だが。

そのペンは宙を舞い、一旦浮遊したペンをサウザが捕まえた。

…あり得ない。

この地球上の重力から考えると不可能だ。

そんなヘリコプター並みに回転していたわけでもあるまいし…。

「おい…お前…」

「…その先の事は言わずにいてください。貴方だからこそ見せたんです。

席も一番後ろで他の生徒は見えて居ないですしね。」

「…とりあえず一つだけ。俺の質問に答えろ。」

「えぇ。分かりました。」

「…お前は…何者だ？」

サウザは黒板の方へ身体を向き直してから小さく応えた。

「……能力者≪スキルプレイヤー≫、とでも言うべき者です。」

「能力者≪スキルプレイヤー≫…だと…？」

case. 3　苦肉の策

「まぁ、詳しい話は後でにしましょうか？　電子図書館の核の中で待ってますから…。
　カウンター近くのメモ通りにすれば僕に会えますよ。」
その時、タイミングが良いと言ったらいいのか悪いと言ったらいいのか。
授業終了のチャイムが鳴る。
チャイムが鳴ったと同時にサウザは席を立ち、廊下の方へと消えて行った。
「レイ！今日は2時間で終了だよー…って、何考えてるの？」
俺のしかめた面を覗き込むユア。
「さっきの転校生、俺に変な言葉を吐き捨てて行っちまったんだ。」
「なんて？」
「電子図書館の核の中で待っている。カウンター近くのメモ通りにすれば
　僕に会える…と。」
「…電子図書館って、うちの図書室の別名だよね。
　丸い構造をしているから化学の電子と電子機器と掛け合わせて名

付けられたとか。」

「まぁいい。とりあえず行ってみるか。」

「さてと。ここか。初めて入るな…。」

「自習する時に活用しなよ。」

「うるせー。家でやったほうが落ち着くんだ。」

「で、メモは…あ、あった。」

メモ紙はカウンターのところに貼ってあった。
しっかし…他の人が破り捨てでもしたらどうするつもりだったんだよ。

「んー？…」

メモには、
『カウンターの電子ボードにここの電子図書館の謎を解いた答えを書け。
ただし、答えは単語４つ。日本語で書け。
ヒントは法則性。その法則性が答えだ。
真中は苦し紛れという事で了解してくれるかな？』
と、記してあった。

「…電子図書館の謎？聞いたことないよ…。
しかも苦し紛れって…。」

「あー、やってられっか。行くぞユア。」

俺は出口の扉を開こうとする。だが…

ガチャガチャ。

「…えっ、ちょっ、開かない？」

「…閉じ込められたって事ね…。」

「新学期早々やってくれるな。畜生め…。」

「さて、レオ君。謎を解くしかなくなったようだけどどうする？
扉を破壊して強引にでも出て行く？」

意味深な微笑を浮かべるユア。…答えは決まってんだろ？

「…手伝え。この謎解きにな。」

「そう言うと思ったよ。このツンデレさん。」

「さて。とりあえず謎と言ってもな…。法則性か…。」

「ここの図書館の構造は。ど真ん中にカウンター、で、カウンター
を囲むように円状に広が　ってるのが本棚。本棚は3周分あるよ。」

「どんな法則性があるって言うんだ？」
「んー、本の並び方とか？」
「…そんな3周分もあるってのにか。」
「あ、でもここはもう少し広くなる予定だったって聞いたことあるよ！
ただ、それには校舎も広げなきゃいけなくて結局断念したとか…。」
「広く…？じゃあ、4周、5周の可能性もあったってわけか？」
「うん。教頭が言ってた。」
いや、お前は何故教師とそんなに仲が良いんだよ。
俺なんか提出物出さないから評価悪いぞ…。
「円状の特性上、2周目よりも3周目の方がたくさん本が入るんだな…。」
「…待って。電子…？」
「そうか！電子だ！ここは化学の電子と同じ構造になっているんだ！！」
「でも、単語四つって…？」
「多分、置いている本の種類じゃねーかな…。確かめてみるか。

…どうやら、…論理的思考だの、哲学だのが書かれている本ばかりだ。」

俺は本の種類を見ずに、上に貼ってある種類札を見て応えた。

「えっと、２周目が…化学、生物、…理科系統だね。」

「３周目が、小説が沢山あるな…。あー…何が何だか分かんねーぞお！？」

頭をぐしゃぐしゃに掻く俺。

分からない事があるといつもこうやってしまう。

自分で言うのもアレだが、数少ない自覚している癖だ。

「論理…化学…小説…ピタリ一致するよう法則性はないね。」

「…何かに置き換えるのか？これを…。」

「英語に置き換えるのは…？」

「英語だと？えっと…論理は…Ｌｏｇｉｃで、化学はＣｈｅｍｉｓｔｒｙ、小説は…Ｎｏｖｅｌ…」

「法則性なんて無いけど…。」

「まてよ、理科系統は昔は魔術とかも言われていたから…Ｍａｇｉｃか？

そして小説は文学とも言え、郷愁とも言う…。Ｎｏｓｔａｌｇｉｃ…？」

「あっ！！最後が全部『ｇｉｃ』で終わるよ！！」

「Ｌｏｇｉｃ、Ｍａｇｉｃ、Ｎｏｓｔａｌｇｉｃ…。これじゃあ四つだな…。他にも法則性はないのか？」

「うーん…。ろじっく、まじっく、のすたる……」

「「あ！！」」

俺たちは二人揃って同じタイミングで同じ言葉を吐いた。

「Ｋ殻、Ｌ殻、Ｍ殻、Ｎ殻だ！！」

「真中はカウンターで…って、スペルはＣｏｕｎｔｅｒじゃない？」

「…無理やりローマ字読みにでもしたんだろうよ…。最初に苦し紛れって書いてあったしな。

苦肉の策ってことだ。」

そう俺は言いながら電子ボードに向かって、単語を書き連ねる。

カウンター・倫理・魔法・郷愁

カチッ

ウィィィィィ……

ガチャンッ

「おっ」

「何かが開いた音がしたね…。」

と、ユアが言った次の瞬間、俺たちはすごい勢いで床ごと真下に落ちて行く感覚を覚えた。

ｃａｓｅ．　４　奇々怪々

「うおおおお！！？？」

「な、何これ！！？？」

俺らが戸惑っている間に、超高速エレベーターは目的地まで着いたようだった。

しかし。

本来ならば電気などの人工的な光が俺らを照らすはずなのにも関わらず俺達の真上には…

憎たらしいほど燦々と輝くお天道様があった。

しかも、視線の先には校舎が見える。…どうなっているんだ…？

「…いやちょっと待て…俺らはエレベーターで下に降りた…はずだよな？」

「…うん。これが幻覚じゃなければ…ね。」

「おかしいだろ…エレベータの様なもので俺らは下に落ちたんだぜ…？」

俺は走馬灯のように今までの事を思い出してみたが、うむ。やはり

学校の外へは出ていない。ここは学校のグラウンドから通って行ける宿舎だ。

「幻覚じゃないさ。列記とした現実だ。」

と、ここで何者かが声を発した。

…男であることは間違いないが、どう考えても大人びてはいない。しかし、どこか俺らの世代とはかけ離れている…とでも言った方が良いのだろうか。

「…誰だ。」

緊迫のある声で俺はそう言った。

決してそう言おうとしたのではなく、喉に付いてる筋肉がそう動いたのだ。

「姿も現さずに自己紹介するのは気が引ける。出て行こうじゃないか、サウザ。」

「そうですね。ここへ来れたのも第一段階のテストを突破したわけですし。」

そう二人が応えると、宿舎の扉が開き、二人の人間が姿を現した。一人はあのハーフの転校生で、もう一人は制服のネクタイの色が違うので一学年上のようだ。

「テスト…だと？」

「えぇ。あの僕の言葉だけでここまで来れたんです。行動力は８０点。」

１００じゃないのは何故だ。と、突っ込みたかったがそれよりももう一人の方が気になって仕方がなかった。
それはユアも同じだったようで、俺よりも先に質問を投げかけた。

「…あなたは…？」

「…おいおい、そっちが名乗る前にか？」

呆れたように言う上級生。少しだけ、腹が立ったので俺が次に口を開いた。

「あんたがここに連れてきたんだ。優先度はそっちの方が上だろう。」

「はっ。これは失礼。俺の名前は水無月　龍星‐みなづき　りゅうせい‐だ。
ここへお前らを呼んだのにはちょっとわけがあってな…。」

「見ず知らずの2年次2人を拉致ってか？」

「おいおい、拉致とは酷い言い方じゃないか？好き好んで来たのはお前らだろう。」

…言われてみればそうであるのは間違いなかったために、俺ら二人は返す言葉が見当たらなかった。

「なんなら今すぐにでもとんぼ返りしたっていいんだぜ？」

「それは遠慮しとく。上級生だろうが大人だろうが関係はないな。」

「ほぉ。良い意気込みだ。では、第2試験を開始するか…。」
と、水無月と名乗る輩はポケットから何やらリモートコントローラーの様なものを取り出した。
そして…
ピッ
ボタンを押した瞬間に、地面が揺れた。
震度5はあろうかと思えるくらいの突然の揺れに俺は前に倒れ、ユアは芝生の上に座り込む。
それに追い打ちをかけるかのように上からアクリル板のような巨大な壁が迫ってくる。
そして、ユアと俺ら3人を隔てる透明なベルリンの壁が完成してしまった。
「おい!!これはどういうことだ!?」
「まぁ、落ちつけよ。これは『能力』を見極めるテストだ。」
「能力…だと?」
「さっきの教室での出来事。覚えてますか?」
「教室で何て…お前が転校してきた事くらいしか…」
と、その時に一つのカギが俺の頭の中を横切った。

「能力者…と、お前は言ったな…。そして、シャーペンを浮かばせたのもお前…？」

「えぇ。僕は能力者です。能力の名前は『物質移動～ポルターガイスト』ですよ。」

「ポルター…ガイストだと？」

「えぇ。まぁ、幽霊のようにモノを動かせる能力なのでそう呼ばれてるだけですが。」

「じゃぁ…ユアの能力は何なんだよ！？」

「…今から分かるさ。おいそこの少女！！まだお前の自己紹介は済んでないぞ！！」

「…椰子岡……優愛。」

「優愛か。良い名だ。椰子岡！！絶対に命の保証はしてやる。しかし、今からとんでもなく危険な事が起こる。それに対処できるか！？」

と、意味不明な発言をしており…

と、ニュースならば続くであろう言葉を水無月は口走る。

「…そんなの、やってみなきゃわからないんじゃなくて！？」

「お前馬鹿だろ！！！」

咄嗟にツッコんでしまった。
いや、反射神経がマジで反応したように。

「御尤も。じゃあ…始めましょう。」

サウザは腕を前に突き出したかとおもうと、手をグーからパーの形に大きく開いた。
その瞬間に、クリアタイプのベルリンの壁の向こうの岩、木々がユアの方へと磁石に吸い寄せられるように飛んでいく！！

直感で俺は危ないと感じたが、俺の体はそう簡単には動いてはくれなかった。
1年次の頃に、運動部へ入っていれば…とは思ったがそれは既に遅かった。

ｃａｓｅ．　５　１００の努力と１００の才能

「あぶねぇぇぇ！！！！」

必死に俺はユアの方へ駆けだす。
だが、水無月はその俺をがっしりとつかみこういった。

「……大丈夫だ。見て居ろ。」

「何言ってやが…る…？」

ガキンガキン！！

ユアが頭を抱えて床に伏せているが、周りに何か透明な壁があるような感じで全ての浮遊物体を跳ね返す。

「なんだ…？あれは…」

俺は驚きの表情を隠しきれない。

「あれは、防御～ガードだ。能力の一種だよ。
スキルレベルは…３と言ったところか。」

「防御…。じゃあ、お前が使った能力は一体！？」

「ですから、物質移動～ポルターガイストです。あんなふうに派手に使うこともできるんですよ。」

「じゃあ…俺だけなのか？能力者ではないのは…。」
そう俺が言うと、キョトンとした顔で水無月は言った。
「おいおい、まだ自分の能力に気が付いていないのか？」
「…何の事だ？」
本当に思い当たる節がないか自分の無い頭を捻ってみた。
すると、たった一つだけ。思い当たる節があった。
「…まさか、今日の遅刻か？」
「御名答。まぁ遅刻はしてないがな。」
「…それが、俺の能力なのか？機械破壊とかそんなものなんだろう？
どうせあの時計が狂ってただけだろ。俺の家の時計が。」
思いつきで即席のでたらめな能力を言ってみた。
「…そんな能力もこの世界の誰かは持ってるんだろうけどな。
お前の能力はもっと別だ。」
「…創造～クリエイト～ですよ。レベルは…そうですね。４あたりでしょうか。」
「クリエイト…？」
「お前の家の時計が狂っていたわけじゃないさ。学校の時計もお前

の家の時計も正確な時間をさしていた。
　狂っていたのは、そう。『時間』だ。お前の遅刻したくないという思いが時間を逆戻しにしたんだ。」

ウィィィィィィィィィィ……

と、透明なベルリンの壁が地面に収納される。
それと同時にユアは俺のところに走ってきた。

「…怖かった。」

少し不満げに拗ねるユアの顔を俺は久しぶりに見た。
不覚にもその顔を見た俺は顔を赤らめてしまう。

「さて。もっと深くまで能力の説明をしなくてはならないのだが、時間がない。
　とりあえずこれでも急ぎ目でやっていたのだが…サウザ、様子は？」

「…若干予定よりもおしてる。少し急いで！
　すぐに彼らに説明しなくては…。」

「…そうか。じゃあ…まずは俺の能力からだ。
　一つ質問に答えてくれ。お前たちがこの世界に適しているかどうかの適性判断だ。」

「…さっきのではまだ判断できてないのかよ？」

「…いいよ。麗音。やってやろうじゃない。」

威勢良くユアが言う。

「お前が乗り気なら俺もやるしかねぇよな…。いいぜ。水無月。」

「良い返事だ。さて。最初で最後の質問だ。よーく聞けよ。一度しか言わない。」

『お前達は特技と才能のどちらが欲しい？』

予想外の質問だった。

というか、そんな質問が来るとは微塵も思っていなかった。

最初で最後

特技と才能

正反対のモノだ。

特技は練習して『努力』して得られるモノ。

『才能』は元々生まれつき持っているモノ。

どちらが欲しい…か。

まぁ既に答えは決まっていたけどな。

恐らくユアも同じことを想っているのだろう。

「…答えが出たようだな。俺も能力を使う準備をしておこう。
…言ってみろ。その答えを。正解はただ一つ。お前らに託された。
」

『特技と才能、欲しいのはどっちか。』

「俺は…」
「私は…」

『努力をする才能が欲しい！！』

二人の気持ちと答えが一つになった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8768t/

サイノウの果てに

2011年10月12日15時52分発行